2021年6月9日、当社の飼料用米を栽培して頂いている庄内町の五十嵐光博さんが、農林水産省主催の「飼料用米多収日本一コンテスト」において日本農業新聞賞を受賞しました。
当日、当社にて撮影。向かって右側が五十嵐さんです。

農業新聞　2021年(令和3年)7月28日(水曜日)　(12)

大豆輪作で800キロ達成

尿素で低コスト　肥料費削減にも注力

収益高める　飼料用米

米の需給緩和の影響で飼料用米を作付けする農家が増え、飼料用米の収益向上に関心が高まっている。安コスト技術や生産に必要な栽培管理に取り組み、飼料用米で手取りを高める農家を紹介する。

山形県庄内町　五十嵐光博さん

山形県庄内町の五十嵐光博さん（53）は、水稲と大豆の輪作で施肥コストを削減しながらも、10アール800キロ以上の高収量を達成する。大豆作後の水田では、元肥の窒素成分を大幅に削減。今年度は初年度、元肥として高度化成肥料を減らした。窒素成分を10アール2キロと、通常の1・2割にする。

農水省の「飼料用米生産コスト低減マニュアル」では、大豆や麦類、野菜など畑作物の後作では、地力窒素や残存窒素の発現量が高まり、元肥の量を減らせると解説。大豆との輪作で生産コストを全体で3割減らすと試算する。

さらなるコスト削減へ、五十嵐さんは水稲を栽培して3年目の水田で今シーズンから、高度化成肥料より安価な尿素と発酵鶏ふんを使い始めた。効き目が早い尿素は、過剰生育による倒伏の懸念もあるが、「飼料用米品種は茎が太く倒れにくい」と判断。窒素成分で尿素を同4キロまき、肥料代を高度化成肥料より同4500円ほど安く抑えた。

6月下旬時点での生育は、従来と変わらない。元肥のコストを削減する一方、追肥に向けて追肥を調整し、水稲の生育状況や収穫や乾燥量を変えるが、例年7月上旬に尿素を窒素成分で同2キロ、7月中下旬に同1キロを追肥にまく。

五十嵐さんは、農水省が主催する20年度の「飼料用米多収日本一」の単位収量の部で日本農業新聞賞を受賞した。同年の収量は、地域平均を3割以上上回る10・807キロだった。五十嵐さんは「今後も資材削減や検討を進めながら、安定収穫を目指していく」と意気込む。

飼料用米「ふくひびき」の生育をみる五十嵐さん（6月下旬、山形県庄内町で）

2021年7月28日の日本農業新聞記事にて五十嵐さんが紹介されました。